

# 心の中にある「感謝」の気持ちを “見える化”できる方法はないか。 それが “ブルーフラッグプロジェクト”だ。

コミュニティアーティスト、まちぐみ組長、barスマモリ店長 山本 耕一郎



今年4月。社会はまるでネガティブなウイルスにでも感染しているかのように思えた。新型ウイルスについては、まだ何もわかつていなかつた。わかつていいが故に世界中で不安が拡大し、メディアやネット上で様々な情報が発信され、批判が飛び交っていた。その社会の空気の中で、私は言葉にならない気持ちで過ごす日々が続いていた。

しかし、ひとつだけ明確に“わかっていること”があつた。それは、医療従事者や日々の生活を支えるエッセンシャルワーカーの方々に、私たちの生活は支えられているということだ。これだけは間違いないと確信を持つことができた。



1969年名古屋生まれ。青森県八戸市在住。筑波大学卒業。英国Royal College of Art大学院修了。“うわさプロジェクト”や“このまちのカレンダー（まちカレ）”、“barスマモリ”など、全国で地域と深く関わるプロジェクトを開催中。2014年より八戸市中心街で『なんか楽しそう』をつくり出す市民集団“まちぐみ”を発足し、南部薊刺しや南部せんべいなどの地域の宝を市民とおもしろく発信するプロジェクトを行中。

そのような方々に感謝を届けようと、建物を青くライトアップする“Light It Blue”キヤンペーンや、決まった時間に窓を開けて拍手をする活動が世界中で始まつた。優しい気持ちと想像力を持った人たちが世界中にいるということに心が救われた。

「きっと八戸市民も同じ気持ちを持っているはずだ。」

心の中にある「感謝」の気持ちを“見える化”できる方法はないか。それが“ブルーフラッグプロジェクト”だ。



内容は非常にシンプル。不要な青い布でフランクをつくり、それを中央街の店頭に飾るというも。青色は医療従事者のユニフォームの色が由縁だ。

医療従事者やエッセンシャルワーカーの方々へ感謝を「表現す

る」と同時に、私たちの生活が多くの方々に支えられているということを、フラッグを目にしたときにふと思い出すキッカケを作ることを目的としている。

最初は1人での活動だつた。毎日ひたすらフラッグを作り、企画の説明と設置のお願いにお店に足を運び、賛同を得たお店から少しずつ増やしていくた。

4月24日、本八戸駅通りに「医療従事者の皆さんありがとうございます」と描いた特大看板を設置することを皮切りに、Facebook上で手作りフラッグの寄付を呼びかけ、手作りできない人には青い布の寄付を募つた。

間もなく、この活動を知つた八戸ポータルミュージアムはつちが趣旨に賛同し、一緒に活動をしてくれることになった。5月2日には、はつち外壁とマチニワにフラッグ約100枚が飾られた。

「おうち時間」を活用してフラングづくりをしませんか？断捨離で不要な青い布や衣類が出てきたら寄付してくださいといふ意味合いもあつた。

新聞、テレビ、ラジオで紹介されたことも後押しになり、活動は少しづつ市民に知られるようになった。

はつち前に置かれた寄付ボックスには連日、手作りフラッグや布が入るようになり、中には応援のメッセージも添えられ、「共感」してくれる人たちがいることを実感できたことがとても励みになつた。

八戸工業大学第二高校の情報ビジネスコース1年生22人は、放課後によく活動を知り、Facebookで活動を覗いていた。彼らは店内に飾っています」と写メを送つてくれた。「子どもと作つ

たフラッグを飾つています」と自宅の写メが届いたこともあった。

月半が過ぎると（6月初旬）賛同店舗は100を超えて、今も増え続けている。青いフラッグが至るところで浜風に吹かれ揺れている。

「うちの店にも飾つてください」と会いに来てくれる店主さんや、「うちの空いてる垂れ幕スペースを使つていいよ」とか、「うちの看板つけていいよ」「ポスター貼つておくよ」近所のお店に話して許可もらつとくからなど、多くの方が設置作業中に声をかけてくれるようになった。

たフラッグを飾つてほしいとの場合、設置期間を聞かれことが多い。しかし、今回のブルーフラッグプロジェクトでは、ほとんど聞かれることがなかつた。

自肃、休校で苦しい時間を過ごした方が多い中、こんなに多くの方が力を貸してくれている。八戸ついていいまちだな、あらためて実感させられる。



活動開始から1ヶ月



緊急事態宣言が全国で解除され、感染が少し収まつた印象だが、それでも医療従事者やエッセンシャルワーカーの皆さんのが、感染の危険と隣り合わせだということに変わりはない。それをまちの皆さんもよく理解されているのだろうと思う。